

## 言説としての政治文化論批判：イタリアの事情から

著者	村上 信一郎
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	84
ページ	117-148
発行年	2013-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00001342/">http://id.nii.ac.jp/1085/00001342/</a>



## 言説としての政治文化論批判 —イタリアの事例から—

村上信一郎

### はじめに

政治文化という言説において、イタリアは、いつも、外部の他者の目を通して、ある一定の期待された役割を担うべき事例として扱われてきたように思われる。

イタリアは、ゲーテの『イタリア紀行』はいうにおよばず、18世紀のイギリス貴族のあいだに大流行したグランド・ツアーが示すように、西欧・古典古代文明発祥の地であり、そうした中心の起源を不断に想起させる歴史的かつ美的な想像力の源泉をたたえる土地として、多くの人々の憧憬の対象となってきた。ところが、世界の中心との有機的な連続性を失うことはないとしても、すでにそこからは遠く離れた、エキゾチック（異郷的）でノスタルジック（懐古的）な魅力を放つ失樂園だと見なされてきた。それゆえ外部の観察者の必要に応じて異質性、境界性、周縁性、過渡性、両義性、さらには悲喜劇性、両性具有性といった多種多様な表情を示してくれる好都合な観察対象として長い間珍重されてきた。

政治文化の言説におけるイタリアは、西欧先進民主主義諸国と文明論的には同じ遺伝子を持つ身体であるにもかかわらず、それらの国々と比較すれば、つねに不正常で不健康であるばかりか、ときには病理的とさえいえる例外や逸脱を示す、いわば永遠の病人を運命づけられてきた。よくいえば民主主義の実験室、だが内実は政治的ウイルスの培養器。幸運にも民主主義を蝕むウイルスが発見できれば、ワクチンで病気が治せるかもしれない……

ところで *The Civic Culture* が公刊を見たのは1963年。著者のアーモンドとヴァーバが社会調査を行ったのが1959-60年。爾来すでに50年が過ぎた。本書のような基本的には調査データに依拠する実証研究を、半世紀後の後知恵で批判するのはフェアな学問的態度とはいえないという意見もありうる。だが著者自身も *The Civic Culture Revisited* (1990) で率直に認めているように、この研究もまさに「時代の産物」でしかない。そもそも civic culture 自体が、そうした伝統や文化のないところでは本質的に翻訳不可能な（したがって操作化不可能な）価値規範を内包するイデオロギー的な概念である。また parochial / subject / participant という政治文化の3類型や、allegiance / apathy / alienation

という文化と構造の照応の有無を示す3類型も、現在の知識からすれば、あまりにも素朴かつ先験的なモデルといわざるをえない。ちなみに、イタリアはあらゆる指標において米英独墨（メキシコ）よりも劣位にある、疎外の政治文化だとされている。しかも、そこには人類学者バンフィールドがイタリア南部バジリカータの僻村の調査から析出した *amoral familism* という知見が色濃く投影されていた（*The Moral Basis of a Backward Society*, 1958）。

ところが、驚くべきことに、高度成長期以前の世俗化や教育の大衆化も不十分な戦後再建期に構築されたステレオ・タイプが、その後も独り歩きし続ける。まるで若い時に撮った身分証明写真が、色褪せたあともそのまま使い続けられるようなものであった。実際、第一共和制が崩壊しようとするまさにその時に、こうしたステレオ・タイプの変種としかいいようのないパットナムの *Making Democracy Work* (1993) の公刊をみたのである。ただ、*civic tradition* を北中部には認めるが、南部には認めないという修正が施されていた。偶然の一致かもしれないが、それはすでに19世紀の国家統一期に構築され、その当時は地域分離主義を唱えるロンバルディア同盟（後の北部同盟）が声高に喧伝していた南部をめぐる人種差別的な言説を、もろになぞるものであった。パットナムは20年にも及ぶ現地調査と思索の果てに、*civic tradition* なくして *civic community* なしという、ある意味では皮肉な、同義反復としかいいようのないステレオ・タイプの結論に到達したのである。

ここでは、こうした事例をとおして、言説としての政治文化論批判を試みてみたい。

## 1. イタリアという表象

政治文化という言説においても、イタリアという表象は、いつも、ある一定の役割を果たすことが期待される、特異な事例として扱われてきたように思われる。そこで、まずはイタリアという表象の成立について一瞥しておきたい。

イタリアという呼称には諸説あるが、この語を最初に用いたのはギリシア人だといわれている。ギリシア人はイタリア半島南部カラブリアの *Bruttium* に暮らす *Magna Graecia* の同胞たちを *italiôtai* と呼んだのだという。あるいはカラブリアに暮らす牛をトーテムとする住民に由来し、牛 (*vituli*) という語がギリシア語化するときに語頭の *v* が脱落して *italói* となり、それが対象とする地域が次第に北のほうにまで広がっていき、やがては都市国家ローマにまでこの語（およびイタリキ族 *italici* という呼称）が使われるようになったのだという。さらにはエトルリア語で牛を意味する *italòs* にこの語は直接由来するという説もある。そしてアウグストゥス帝（在位前27―後14年）の時代にはア

ルプス以南のイタリア半島を示す地理的概念として、この語が定着するようになっていたとされている。いずれにせよイタリアという呼称はギリシア文明との深い結びつきのなかから生まれてきたといえよう。

その後のイタリアはローマ化されていくことで都市とラテン語という二つの伝統を深く刻印されていくことになる。その一方で、衰退していくローマ帝国と相前後するような形でローマ・カトリック教会がキリスト教世界における権威を確立していき、さらにはイタリアに世俗的支配権まで行使するようになったことから、ローマ教皇の存在はこの地に絶大なる影響力を及ぼしていくようになる。こうしてローマ皇帝権とローマ教皇権に由来する二つの権威はイタリアに生きる人々にとって重要な文化的想像力の源泉となると同時に、それらが「普遍性」(universality)を標榜する限りはイタリアの統一や自立を支える論拠を提供するものとはならず、かえって「栄光と頹廢」(grandezza e decadenza)という宿命論的な諦観をもたらす遺産となり桎梏となっていったのである。

しかし現実のイタリアは568年のランゴバルド族の侵入により、ランゴバルド王国とビザンツ帝国に分裂し、それまでの政治的行政的一体性を失う。756年にはフランク王ピピンの寄進によって教会領が成立したことで、さらに分裂が進んでいく。イタリアにふたたび統一国家がもたらされるのは、じつに1300年もあとの1861年におけるイタリア王国の成立を待たなければならなかった。

20世紀のイタリアを代表する哲学者にして歴史家であったベネデット・クロウチェがいみじくも述べたように、1860年以前には「イタリア史」は存在しなかったのである。たしかにオーストリアの宰相メッテルニヒも、1848年革命の前夜に、イタリアというのはたんなる「地理的表現」(un'espressione geografica)にすぎないといった。しかし国家統一以前のイタリアに歴史がなかったわけではもちろんない。それどころか複数の中心を持ち多極的かつ多層的な歴史が国際政治の力学と複雑に絡み合いながら営々と展開され続けてきた。それゆえイタリアという表象は政治的な国家統一という狭小な一つの目的論的な帰結のなかには収まりきれない多義的な内包を必然的に孕まざるをえなかったのである。

たとえば、ニーチェにも多大な影響を与えたスイスの歴史家ヤーコブ・ブルクハルトによって『イタリア・ルネサンスの文化』(1860年)で描かれたのはあくまでも文化史的な概念としてのイタリアであった。だがダンテやペトラルカが現実生きていたイタリアは、諸邦が分裂を繰り返し、外国の軍隊が跳梁跋扈するという、まさにダンテが「ああ、奴隷となりしイタリア、懊悩の宿よ」(Ahi serva Italia, di dolore ostello) [ダンテ『神曲』煉獄篇第6歌]と嘆いたようなイタリアに他ならなかった。いかにフィレンツェ共和国の書記官ニコロ・マキャヴェッリが外国勢力による軍事支配からの祖国の解放と統一を願っ

たとしても、その夢が叶えられるどころか、彼が死を迎える1527年には、かえって神聖ローマ皇帝カール5世の軍勢による「ローマ劫略」(sacco di Roma)という辱めを受けることになる。そしてダンテやマキャヴェッリなどのumanistaたちが抱いた古代ローマの共和政や帝政を理想とする祖国統一の夢は、そこでいったんは途絶えてしまう。いいかえると彼らの見果てぬ夢が、18世紀の啓蒙改革期や大革命後のフランス支配期の諸改革を経験するなかで徐々に形成されていくことになるリソルジメントの多様な運動のなかに直接的な形で影響を及ぼして継承されていくというようなことは、実際には生じえなかったのである。

ところで、文豪ゲーテが前後20カ月にわたる念願のイタリア旅行を敢行したのは1786年から88年にかけてのことであった。しかし『イタリア紀行』が刊行を見るのは、それからほぼ30年近くも経った後である。古典主義の詩人ゲーテが誕生するにあたってイタリア旅行は決定的な意味を持ったといわれている。たしかにゲーテは「この地には全世界史が結びついている」といって、イタリアの美術や建築あるいは自然や風土さらには植物や鉱物に至るまで飽くなき好奇心を示していたばかりか、のちに自分はローマに「帰化」したとまで述べていた。ところが、ルネサンスが花開いたフィレンツェには立ち寄りもしなければ詩聖ダンテに言及することもなく、アシジの聖フランチェスコの墓に詣でることもなければ、サン・ピエトロ大聖堂で教皇自らが執り行った荘厳なクリスマス・ミサにたいしてもほとんど何の感興も示さなかったのである。

グルノーブルに生まれたアンリ・ベールすなわち『赤と黒』の作家スタンダールが、ナポレオンの第二次イタリア遠征に従って初めてイタリアの地に足を踏み入れたのは、1800年、17歳のときであった。その10年後再びミラノやってきたベールは、何よりも数多くのイタリア人女性との情熱的で危険な恋愛の体験をとおして、ナポリの作曲家チマローザやルネサンスの画家コレッジョを好むようになり、祖国フランスよりもイタリアに強い愛着を覚えるようになっていく。こうして墓碑銘には「ミラノの人エッリコ・ベイル」(Errico Beyle, Milanese)と記すように遺言するまでとなっていたのである。

このように、イタリアについての表象は、その当時においてイタリアが未だ存在せざる国である以上その地に暮らす人々だけに許された特権とはいえないものとなっていた。いいかえると、イタリアの表象は何世紀ものあいだ様々な動機からこの地にやってきた数多くの外国の人々によって、ある意味では自分たちの勝手な思い込みに合わせて恣意的に構築されてきたものでもあった。

この小論ではもうこれ以上詳述することは不可能であるが、啓蒙期の優れた研究を残した歴史家フランコ・ヴェントゥーリがエイナウディ社版『イタリア史』(3巻「18世紀前半から統一まで」1973年)のために著した「イタリアの

外のイタリア」(L'Italia fuori d'Italia)を繙くならば、いかに複雑で密度の濃い知的交流や相互作用を経てイタリアの表象が構築されていったかは、たちどころに明らかとなるであろう。その当時の知識人たちはヨーロッパ規模での交流を行っていたのでありイギリスやアメリカからロシアにまで及ぶ「文芸の共和国」(république des lettres)を築き上げていたことを忘れてはならないのである。

だが、いうまでもなくイタリアの表象はひとり知識人だけがかわわって構築されたものではなかった。それは同ジエイナウディ社版『イタリア史』(年報5巻「風景」1982年)に収められた「グランド・ツアーの鏡に映ったイタリア」や「統一から今日までのイタリアと観光案内書」といったタイトルを見るだけでもすぐに分かることである。イギリスには18世紀の半ばごろから貴族の子弟が欧州大陸に渡って少なくとも1年、ときには5年以上もかけて馬車でフランスやイタリアの各都市を遍歴しながら、古代文明やルネサンス芸術の精華を見聞することで教養を深めるとともに、洗練された宮廷文化や社交術ひいては語学の習得まで図ろうとするGrand Tourの伝統があった。そうした伝統は、主要な交通手段が馬車から鉄道に変わって、貴族からブルジョワ中流階級の子弟や女性にまで許されたものとなり、当時流行っていたドイツの『ベデカー』Baedekerなどのガイドブックを携えての安逸な観光旅行に形をかえながらも、その後においても残り続けたのである。

すでに資本主義は工業化と深く結合して個々の国民国家の枠組みを越えた国際的な市場で熾烈な競争を展開するものとなり、人類社会におけるそれぞれの文明、人種、民族、国家、階級のあいだの優勝劣敗をふまえたうえで観光に勤しむことは、こうした旅行者にとっても、むしろ当然の前提となっていた。

イタリアは貧しく遅れた国であった。その第一印象は不潔、怠惰、猜疑心である。とはいえ古典古代文明の発祥の地にしてルネサンスの故国であった。けれども今では「西欧」(the Occident)の「半周縁」(semi-periphery)にかろうじて位置する文明と野蛮が混在した後進国にすぎない。ところが太陽の光と自然の美に恵まれた永遠の理想郷(arcadia)でもある。そして、このように多層的な二律背反(antinomy)を帯びているからこそイタリアは異郷的(exotic)な魅力あふれるbel paese(美<sup>うま</sup>し<sup>くに</sup>郷)と表象されることになった。旅行者が好んだのは「廃墟のある風景」(paesaggio con rovina)であった。なぜならば西欧の「オリエン特」に再帰的(reflexive)な形で西欧を再発見したいと考えていたからである。

## 2. The Civic Culture : Italy's Alienated Political Culture

*The Civic Culture: Political Attitude and Democracy in Five Nations* (Princeton: Princeton University Press, 1963) は1963年に公刊を見た。当時はスタンフォード大学にいたゲイブリエル・アーモンドとシドニー・ヴァーバがアメリカ合衆国、英国、ドイツ、イタリア、メキシコについての調査を行ったのは1959-60年のことである。爾来およそ50年が過ぎた。二人の著者が1990年に著した *The Civic Culture Revisited* (Newbury Park: Sage, 1980) においても認めているように、本書で表明されている関心は「時代の産物」(products of their times)であった。それは社会調査法の利用 (use of survey techniques) と民主主義の安定 (democratic stability) に焦点を合わせる点において示されていたという。そのため市民の政治的態度が政策決定過程に対してどのような入力 (inputs) をもたらすかについては問題としたが、政策決定過程そのものにはほとんど何の関心も払わなかった。「政府は入力を出力に加工する“ブラック・ボックス”とされていた」のである。

おそらく二人の著者のこうした反省のなかに、その後の政治文化論の展開にもかかわる問題点が集約されているといえよう。

第一は、survey technique がもつ方法論的な「革新」の可能性とそれが同時に必然的にもたらす認識論的な限界の問題である。蓋し政治文化の悉皆 (全数) 調査 (total inspection) など不可能だからである。あくまでもサンプル調査である限りは精度に限界があるだけでなく、いかなる技術革新をもってしても誤差を免れることはない。経験的認識に必然的に内在する不確実性といってもよい。この問題はここで詳しく論じることはいできないし、その必要もないだろう。

第二は、民主主義の安定という明示的な価値規範を先験的に想定していることである。当該 survey が明示的な特定の価値規範を予め前提としている以上、その調査項目やサンプルの選択が必然的にそうした価値観によって拘束されたものとなり、その結果についても目的論的で恣意的な解釈を免れえない。ここではそれを目的論的恣意性 (teleological arbitrariness) と呼ぶことにしよう。

第三は、政府の不在ないし無視である。それは政策決定過程の主要なエージェントでありアーリーナとしての政府を無視しているだけではない。それは国家という政治文化にとっても決定的な意味をもつ要因を無視しているのである。市民の政治的態度は政府の政策決定による出力からの影響を被るだけではない。国家は政府に還元できるものではない。国家は政府の外にも様々な制度やイデオロギー装置を持っている。それゆえ政治文化は国家の存在形態やその歴史的発展段階によっても強く拘束されているのである。それにもかかわらず政治文化論は、不幸にも、政治分析にとっては死活的に重要な要素を無視して出発した。

とりあえず、ここではそれを政治文化論のいわば「原罪」(original sin)としての「無国家性」(statelessness)と「非歴史性」(a-historicity)と名付けておく。

ところで、この研究は第二次大戦後のアジア、アフリカにおける「民族の爆発」(national explosions)すなわち民族主義の覚醒、脱植民地化、新興国民国家の独立という「普遍的な圧力」(universal pressure)に促されて行われた。そして、それに続いてやがては「参加の爆発」(participation explosion)が起これると考えた。だが西欧文化に起源をもつ工学や技術の非西欧新興諸国への普及、すなわち物理的、物質的財への技術的合理性の適用(工業化、経済的近代化、近代的官僚制化、合理的組織化)は相対的に容易であるが、「民主主義的な参加型国家モデル」はそうではない。それが実現されるには「形式的な民主主義の諸制度」(普通選挙権、政党、選挙による立法府)だけでは不十分である。なぜならば非西欧新興諸国には「全体主義的な参加型国家モデル」というもう一つの選択肢があり、それも形式的には同じような諸制度を備えているからである。したがって「民主主義的モデル」が勝利するには、それに見合った政治文化が必要であるとする。

しかし、それには二つの大きな困難がある。第一は民主主義の文化が信念体系や人格的関係の規範からなる「広範囲に及ぶ属性」(diffused properties)を持っているからである。第二は新興諸国が科学と技術を過信して性急な近代化をめざすあまり、民主政体の「微妙なバランス」(subtle balance)や市民文化の「ニュアンス」(nuance)を理解することなく、かえって自分たちの伝統文化に親和的でテクノクラティックな官僚制的権威主義に陥る可能性が高いからである。

そこで、こうした二律背反(ambivalence)を解決するための鍵として、著者たちはcivic cultureという概念を提起する。すなわち近代化と伝統主義との一連の出会いのなかから生まれた英国のcivic cultureというモデルである。それは伝統的でも近代的でもなく双方を併せもつ第三の文化である。それはコミュニケーションと説得、合意と多様性、緩やかな変化にもとづく多元主義的な文化である。そして、著者たちはこうした英国モデルが不統合(disintegration)や分極化(polarization)という帰結をもたらさなかったことを高く評価する。

しかし、ここまでの見解についても、次の4つの疑問を呈しておきたい。

第一は、civic cultureが世界システムの覇権国として帝国主義と植民地主義による支配と搾取を当然の前提としてきた大英帝国において培われてきた政治文化のたった一つの側面でしかなかったことを完全に無視しているのではないか。それならば、どうしてこの素晴らしいcivic cultureの種を、英国の国内だけではなく、七つの海を支配した大英帝国の広大な植民地にまで播き広めるこ



とができなかったのであろうか。

第二は、したがって **civic culture** は世界システムの覇権国にのみ許された特権であり贅沢ではなかったのか。つまり帝国主義的かつ植民地主義的な含意 (imperialistic and colonialist implication) を免れえないモデルではないのか。

第三は、さらには **civic culture** なるものは世界システムにおける外在的存在条件がまったく異なる新興諸国には本質的に移植不可能なモデルではないのか。

第四は、いずれにせよ **civic culture** はある一定の歴史的諸条件のなかから生まれた文化であり、かりに英国に限ってみても、じつは一回限りの再現不可能な特殊な現象だったのではないだろうか。

もちろん、これは後知恵にもとづく疑問であり、その意味ではないものねだりである。だが、それゆえにこそ本書は、著者たちもすでに認めていたように、本書が「時代の産物」でしかないということを再確認することができよう。

さて政治文化とは政治的な志向性 (political orientation) を意味する。そして政治システム一般、その入力 (たとえば政治家)、その出力 (たとえば政策)、自己の役割からなる4つの志向対象と、認知的 (cognitive) 志向、情緒的 (affective) 志向、評価的 (evaluative) 志向からなる  $4 \times 3$  の単純なマトリックスを作れば、一個人の政治志向を体系的に表示することができるという。それをもとにして今度は、政治文化について、あらゆる政治対象について志向の頻度がゼロを示すものを **parochial**、政治システムとその出力には志向の頻度は高いが入力と自己の役割についての志向の頻度がゼロを示すものを **subject**、最後にすべての政治対象について志向の頻度が高いものを **participant** と3つに分類した。

ただ、現実にはこの3つの純粋型だけが存在することはありえず、たいていはそれらの混合型である。そもそも **citizen** がこの3種の志向性の混合であり、**civic culture** も **citizens**、**subjects**、**parochials** の特殊な混合 (a particular mix) なのだという。

以上のことを前提として、次に政治文化と政治システムの構造との適合性/不適合性 (congruence/incongruence) について、認知的・情緒的・評価的志向のすべてにおいて適合性を示す場合を **allegiance**、認知的志向のみに適合性を示し情緒的・評価的志向については無関心を示す場合を **apathy**、認知的志向のみに適合性を示し他の二つについては不適合性を示す場合を **alienation** と分類した。

そうすると **civic culture** は、このように操作化可能なものとなった分類を用いるならば、どう説明されるのであろうか。それに先立ち著者たちは、これが **mixed political culture** であり、公民教科書 (civics textbook) にいう **rationality-**

activist model ではないという。たしかに participant model であるが、そこに something else が付け加わった文化だという。すなわち、それは “allegiant” participant culture だというのである。

そこまでは分かるが、著者たちは、civic culture においては、participant orientation が subject orientation や parochial orientation と合体しても、それらにとって代わることはないという。諸個人は政治過程では participant になっても subject orientation ないし parochial orientation を放棄することはない。むしろそれらの融合 (fusion) が生じることに大きな特徴があるとする。nonparticipant よりいっそう traditional な orientation は諸個人の政治に対するコミットメントを制限する傾向をもち、それが政治に対するコミットメントをより mild にするからというのである。

これは、明らかに、英国の政治文化についてよくいわれる deference ないし deferential な態度のことを指していると考えられる。だが、そもそも survey のための客観的な操作化を可能とする分類モデルを作ろうとしている段階で、すでにこのような結論を実証データで裏付けることなしに示していること自体じつは大きな問題なのである。あきらかに、そこには英国モデルから演繹された teleological bias が予断となって反映されているといわざるをえない。

それでは、イタリアは本書ではどのように扱われているのであろうか。イタリアはメキシコとともに、政治システムの移行期にある発展途上の社会 (less well-developed society) の事例としてとりあげたのだという。そして、南部や島嶼部では前近代的な社会的政治的構造が残り、イタリアは近代においても全国的なレベルで allegiant な政治文化を実際に築き上げたことは一度もなかったとする。そして、その理由として、イタリアの統一国家がカトリック教会との対立のために十分な正統性を獲得することができなかったばかりか、カトリック教徒がイタリア人の大多数を占める信者に政治参加を禁じたことやファシスト独裁があったことを指摘する。

それにもまして注目に値するのは、次に詳しく論じることになるが、ハーヴァード大学の著名な政治学者エドワード・バンフィールドが、イタリア南部ルカーニア (現在のバジリカータ州) の仮称モンテグラノー (実名はキアロモンテ) で1954-55年に実施した現地調査の知見にもとづいて、この地域の政治文化 amoral familism とする1958年の著作 *The Moral Basis of a Backward Society* に強く影響されていたことであつた。アーモンドとヴァーバは、イタリアのすべてをこうした概念によって説明することは間違いだとしても、イタリアの政治文化には、ふつうでは考えられない (unusually)、強力な parochial, alienative subject および alienative participant な要素があると述べている。

そして調査から得られたデータからみても、イタリアは、an alienated political culture だと結論する。いいかえると、相対的に救い難い政治的疎外 (relatively unrelieved political alienation)、社会的孤立 (social isolation)、不信 (distrust) を特徴とする政治文化だとしたのである。具体的には、国民的誇り (national pride)、穏健で開かれた政党意識 (moderate and open partisanship)、地域共同体の諸問題への能動的な参加義務の認識、政治的な緊張状況で他者と協力する有効性感覚 (sense of competence)、社会形態を持つ余暇活動の選択、社会的環境への信頼、といった項目において著しく低いと特徴づけたのである。

しかも、こうした特徴はイタリアの政治史を一瞥すればすぐに理解できるという。だが、もしそうだとすれば、このような大がかりな比較調査をやらなくても、こうした特徴についてはすでに指摘されているのであり、その限りにおいては、既存の知識にもとづく stereotype を再確認する同義反復 (tautology) 以上の新たな知見を何一つもたらさなかったといっても過言ではない。

というよりも、むしろ、こうした stereotype にもとづく先入観が著者たちにあったからこそ、civic culture の範例たる英国モデルにとっては著しく好都合な counter-model を示す身近な誰にもわかりやすい事例として、イタリアが選択されたのである。というのもイタリアの政治的疎外は、本質的には伝統的で家父長主義的 (patriarchal) な家族の規範が優越することにもとづく社会的疎外に原因があり、それが家族による社会化 (family socialization) によって若い世代に継承されていくことで再生産されていくとする説明されていたからである。

その一方で、著者たちは、あるところでは、データから得られたせっきくの知見を素直に提示せず、自分たちのイデオロギー的な先入観にもとづく解釈をほどこしたうえで提示する。それはイタリア共産党員についてである。自分たちの定義によれば、イタリア共産党員は participant だという。たしかに彼らは政治をよく知り、政治に関わり、自らの政治的な有効性感覚は強い。だが共産党が政権を取ったら同じような意味で participant かどうか疑問だとする。つまり共産党員であるかぎりには、いくら participant であっても無意味だと決めつけている。他方、憲法と民主主義体制を支持する勢力(キリスト教民主党や世俗中道諸政党)の大部分は subject ないし parochial だとする。

著者たちは、civic culture にとって大事なことは mixed political culture という点にあるとし、少なくとも英国モデルを考えるときにはその歴史的な文脈と展開を重視していたはずである。ならばイタリアの戦後史を考える上で、ファシスト独裁による長期にわたる抑圧体制や、それに対するレジスタンス武装パルチザン闘争においてイタリア共産党がキリスト教民主党さらには行動党など

の反ファシスト政党と国民解放委員会において共闘していたという重要な歴史的事実を、少しは考慮に入れるべきであったろう。いいかえるとイタリア共産党なかんずくその底辺を構成する一般党員はたんなるモスクワのソ連共産党の支配下にあるコミンテルンのたんなる代理人ではなかったのである。

戦後のイタリアにおける grassroots の共産党員がイタリア固有の歴史的文化的文脈に即した非イデオロギー的かつプラグマティックな柔軟な対応を行っていたことは、その後、Sidney Tarrow, *Peasant Communism in Southern Italy* (New Haven: Yale University Press 1962) ; *Between Center and Periphery : Grassroots Politicians in Italy and France* (New Haven: Yale University Press, 1977)によっても明らかにされていく。また、イタリア共産党が、ファシズム以前の社会党に起源をもつ改良主義的な地方自治体社会主義の伝統を戦後においても継承することによって「赤い地域」(zona rossa) と呼ばれることになる緊密なサブカルチャー組織を築きあげたことはよく知られている。

いずれにせよ本書の著者たちは civic culture が mixed political culture だといいつつも、イタリアの歴史的な文脈に即して生まれてきた独自の草の根の自然発生的な動きを無視ないし排除して、自分たちの先入観から「プロクルステスのベッド」(Procrustean bed) に無理やり押し込めようとしていた。その結論がイタリアに alienated political culture というレッテルを張ることであった。いいかえると著者たちには civic culture の英国モデルはあっても、civic culture のイタリア・モデルを構想したり、その可能性を探求したりする意志など毛頭なく、そんな可能性などつゆほども信じていなかった。また、だからこそイタリアを誰もが納得するであろう counter-model の事例として採用したのである。

### 3. The Moral Basis of a Backward Society : A Myth of Amoral Familism

ここで、あらためて、Edward Banfield, *The Moral Basis of a Backward Society* (New York: The Free Press, 1958) を取り上げて検討しておきたい。なぜならば、本書は長らくアメリカ合衆国においてイタリア地域研究入門の標準的な教科書の一つとして用いられてきたものであるとともに、イタリアの後進性をめぐる言説を構築するばかりか、それを流布させる点において決定的な役割を担ってきたからである。

政治学者バンフィールドは、イタリア系アメリカ人のラウラ・ファッサーノ夫人、当時8歳と10歳の子供とともに、イタリア南部ルカーニア（現在のバジリカータ州）のモンテグラノー（仮称、実際にはキアロモンテ）の農民のあいだで1954-55年にかけて9カ月暮らすことで現地調査を実施した。彼にはイタリア語が理解できず9ヶ月後も片言程度（rudimentary）であったという。した

がって70人に面接調査を行ったが、それはイタリア人学生の助けを借りてもっぱらラウラ夫人が行ったものであった。しかも、それはきちんとしたサンプリング調査の手法を用いたものではない。またモンテグラノーがイタリア南部全体を代表しているかどうかについて、自分たちにはどうのこうのといえる資格がない (*we are not competent*) と正直に述べている。それにもかかわらず、モンテグラノーが *fairly typical south* といえる証拠があるのだともいっている。しかし、それはオーストラリアの人口学者のイタリア人移民研究の論文であり、上記の問題に直接答えるものでは全くない。ただ、この論文は、南部の移民では「経済的願望が個人の核家族の安寧 (*welfare of the individual's nuclear family*) としか結びついていない」が、他方、北中部の移民では「物質的な向上が幅広い結社的な行動 (*board associational behavior*) において表現されている」としており、この二項対立図式はバンフィールドの見解にも強く影響を与えているように思われる。

いずれにせよ、バンフィールドは自分の目的が何かを証明するのではなく、一つの理論の外観を明らかにすることにあり、それは厳密な検証を受ける必要があるとしながらも、ささやかとはいえ、それに十分なデータを提供することができたと自負する。ただし自分の理論に即して系統的な検証がなされるまでは、自分の議論は「高度に試論的」 (*highly tentative*) なものと見なされなければならないとも言っている。それにもかかわらず、本書はイタリアの後進性についての表象をめぐる範例的な役割を担い続けることになったのである。

バンフィールドは序章の冒頭において Alexis De Tocqueville, *Democracy in America* の第2巻、第2部、第5章から次のような一節を引用している。

「民主主義諸国では結社の科学が科学の母である (*the science of association is the mother of science*)。他のすべてが進歩するかどうかは、それが成し遂げた進歩によって決まる」。

そして世界のほとんどの人々が *family* や *tribe* よりも大きな *community* のメンバーとなることなしに生まれ死んでいく。欧米は例外としても、*political association* や *corporate organization* における行動の協調を図る *concerting* は減多になく、あるとしてもそれは最近のことである。しかし、*association* は経済発展や政治的進歩に不可欠な要素であることは明白である。ともすれば技術的な諸条件や天然資源があれば、すぐにでも *association* が誕生すると考えられがちだが、実はそうではない。それには文化の壁が立ちはだかっている。というのも *formal* で *powerful organization* を創造するのに必要な諸条件を受けいれようとする文化がなくてはならないからである。

バンフィールドは、以上ことを前提として、文化のなかの *corporate action*

を阻止する諸要因を詳細に検討していくのだという。そして南イタリアの極端に貧困で後進的な一つの村を対象としてそれを行なっていくとする。その村が、どうしてそんなにも貧困で後進的となったのかというと、村民たちが共通善 (common good) のために、すなわち核家族の直接的な物質的利益を超越する如何なる目標のためにも、一緒になって活動する能力がなかったからである。直接的な家族を越えた活動を一致して行う能力の欠如は一つの *ethos* から生じる。それは *amoral familism* である。しかもそれは次の3つの要因の組み合わせから生まれてきた。すなわち、高い死亡率、一定の土地所有条件、拡大家族という家族制度の不在であるという。つまり、貧困と後進性がそうした *ethos* を生み出した原因だという (いうまでもなく、これは循環論法 *vicious circle* であるが、著者は全く意に介していない)。

このようにバンフィールの分析は、ある意味では無防備ともいえるほど単純かつナイーブで *sophistication* とは無縁である。事実、第一章のタイトルは、もろに *Impressions and Questions* となっている。すなわち自らの主観的な印象を分析の出発点とする。バンフィールドは先ず自分がよく知っているユタ州の人口わずか4562人の何の変哲もない田舎町セント・ジョージを取り上げる。アメリカ合衆国では1831-32年にトックヴィルが見たのと同じように、こんな辺鄙な田舎町でも週刊新聞が発行されており、それを読むと赤十字、有職夫人協会、アメリカ農民育成協会、商工会議所、郡農協、地域の教会、PTA など数多くの *association* が活発に活動を展開していることが分かる。

それと比べると、モンテグラノーは人口3400人とほぼ同じ規模で、その大多数は農民か日雇農だが、驚くばかりの対照 *striking contrast* を示しているという。モンテグラノーばかりか近隣の13の町にも新聞がなく、上流階級の25人が創ったトランプやおしゃべりのための *circle* があるが、これがたった一つの *association* だという。もちろん *organized voluntary charity* もない。2つのカトリック教会があり2人の司祭がいるが慈善活動も福祉活動もしておらず、この町の世俗生活では全く何の役割も果たしていない。宗教的な影響力も限られており、日曜日のミサに出席する者も350人程度でほとんどが女性であるし、この町の男性は伝統的に反教権的 *anti-clerical* だとする。

それにもかかわらずモンテグラノーの司祭たちは、教会の祭壇でもその外でも「極端に活動的」(*extremely active*) である。そして1人の弁護士、1人の退役陸軍士官 (町長)、1人の退役治安警察軍士官 (助役) がこの町で最強の政党であるキリスト教民主党 *Democrazia Cristiana* の中核をなしている。だが反教権主義が強いことを念頭におくならば、有権者は教会との結びつきからではなく、むしろそれにもかかわらず、この政党に投票しているのだとする。な

ぜならば総選挙前に、有権者が「ヴァチカンからの贈り物」(gift from the Vatican) と呼ぶパスタ、砂糖、衣類などの小包が配られるので投票しているのだという。しかし共産党は157票しか取れなかったし、その細胞もない。一人の外科医が社会党支部を組織しようとしたが結局は失敗に終わる。王党 Monarchist Party は土地貴族の支持を得てそれなりに強い。しかしネオファシスト政党であるイタリア社会運動 (MSI) は低調である。おしなべてみると政党はほとんど重要な役割を果たしていない。要するに、この町には地元の問題を汲みあげるような political machine もなければ stable and effective party organization もない。それでは、こうした political incapacity をどのようにして説明するのか。それが自らの impression の記述から始まった第一章での question であった。

そしてこれに対する通説的な回答を6つ示す。(1) 多くの人々が絶望的なまでに貧しい。(2) 貧農はロバと同じぐらい無知である(男性の3分の1、女性の3分の2が文盲)。(3) 政治行動は階級利益と階級対立を反映する。(4) 貧農の多くはわずかな自作地を持つがゆえにかえって status quo の維持を欲する。(5) 何世紀もの抑圧的支配のせいで貧農は国家を始めとするあらゆる権威に不信感を抱いている。(6) 南部のイタリア人は絶望的なまでに fatalist である。

こうした通説的な解釈を記すうえで著者にもっとも大きな影響を及ぼしたのはカルロ・レーヴィの『キリストはエボリに止まりぬ』であったのは間違いない。レーヴィは1902年トリノに生まれたユダヤ系イタリア人で外科医にして画家でもあった。長らくパリに親しみ1929年にはカルロとネッロのロッセッリ兄弟とともに反ファシスト組織「正義と自由」(Giustizia e Libertà) を結成する。それが原因で逮捕され1935-36年にイタリア南部ルカーニア地方のアリアーノという僻村に流刑となる。その時の体験を元に自伝的な小説として著し1945年に刊行されたのが *Cristo è fermato a Eboli* (Torino: Einaudi, 1945) だった。バンフィールドはこの英語版 *Christ stopped at Eboli* (London: Penguin, s.d.) をよんで強い影響を受けたことから南イタリアのルカーニア地方を調査地にしたものと思われる。

「ほんとうにキリストはエボリまできて止まってしまったのだ。エボリの町で道路と汽車はサレルノの海岸をあとにして、ルカーニアの不毛の土地にはいりこんでいる。そしてこの土地まではキリストは一度もやってきたことはなかった。いやこの土地にはキリストばかりか、時間もなく、個人的精神もなく、希望もなく、因果関係もなく、理性もなく、歴史もない。(…) しかし、この暗い土地——罪もなければ贖罪もなく、悪はあっても道徳的なものでなくていつ

も身近にある肉体的な苦痛だけしか知らない暗い土地——に、キリストはやってこなかった。キリストはエボリに止まっているのである」（清水三郎治訳『キリストはエボリに止まりぬ』岩波書店、1953年、p.2）。

この引用だけからでもバンフィールドがどれほど強烈な衝撃を受けたかは容易に想像できるであろう。彼が鍵概念とすることになる *amoral* という形容詞が深層において孕む *implication* のすべてがここに示されているといっても過言ではない。道徳がない *amoral* ということは人間ではないということである。それどころか、「獣か駄獣か、いや虫けらにすらおよばない。いや獣や駄獣や虫けらでさえ、彼らの世界では善かれ悪しかれ、それぞれ自由な生活を営んでいる。ところが、われわれは自分たちの力ではどうすることもできない」（前掲書、p.1）。

いずれにせよバンフィールドは本書からおそらくは知らず知らずのうちに「デモクラシーはエボリに止まりぬ」というプロットを刷り込まれていたのである。

バンフィールドは、こうした通説的な解釈をふまえながらも、さらに説得力のある解釈を探るために、次のような一般法則の下に *amoral familist* という一つの *predictable hypothesis* を提起した。

「核家族の物質的短期的な利得を極大化すること。他のだれもが同じようにふるまうだろうということを想定すること」。

「この法則に合致した行動をとる者を *amoral familist* と呼ぶことにする」。

もちろん、モンテグラノの住民のすべてこうした行動をとるわけではない。彼らが「あたかもそうであるかのように」（as if、森鷗外「かのように」！）ふるまっていることが証明できればよいのである。こうした方法論について、註においてではあるが、同僚であったシカゴ学派の新自由主義的マネタリストであるミルトン・フリードマンに言及していることは、まさに *amoral neoliberals* の大失敗による大不況に直面している現在、たしかに興味深いことではあるといえよう。

バンフィールドは、この仮説を証明するためにハーヴァード大学心理学診療科の心理学者 Henry Murray と Christina Morgan が1936年に開発した TAT: Thematic Appreciation Test（主題統覚検査）という心理検査を用いる。これは数十枚の刺激図版（ある状況を表現する絵画）を被験者に提示し、その図版をもとに想像的な物語を自由に話してもらうことで、彼らの無意識的願望や精神的な病理性を解明しようとする投影法にもとづく性格検査である。

バンフィールドは、16人の貧農に TAT を実施し、延べ320の空想物語を得た。するとたいていの農民が「昔むかし、あるところに一人の子沢山で貧しい男が



いました。子どもたちがまっとうな道を歩んでくれるよう身を粉にして働きました」といった類の話から始めた。それなのに「貧しい男のいうことに息子はまったく耳を貸してくれません」という。ここでバンフィールドは、フィレンツェのカルロ・コッローディが1883年に書いたイタリアを代表する児童文学『ピノッキオ』(Pinocchio)に言及する。すなわちジェペットお父さんがピノッキオをまっとうな道に戻そうとする闘いは、モンテグラノーの人々にとっても、根本的で普遍的な心配事を典型的に示しているというのである。

しかし、それ以上に重要なことは、被験者の90%がいつ不運や災難に遭遇するかもしれないと話していることだとする。めでたし、めでたしで終わったのは延べ320のうち2, 3のみだという。これは北イタリアやアメリカのカンザス州の検査結果と比べてみても顕著な相違だとする。こうしてモンテグラノーの住民の基本的な心理傾向は *preoccupazione* (心配) だと考える。

それゆえ災難からの魔除けとして、あるいは幸運に預かるための護符として神や聖人に帰依しようとする。自分の幸せは自分の努力を越えたところで決まり運命の悪戯に左右されると考えているからである。

そんな恐ろしい世界 (*fearful world*) に生きている以上親としてできることは自分の家族を守ることしかない。もっぱら自分の家族の物質的で短期的な利益 *interests* だけにこだわることしかできない。というよりも自分の家族の利益を追求することだけなら何とかできる。しかし他の家族の得になるようなことをするのは自分の家族が損をすることとなる。他の人々に施しをするというような贅沢 (*luxury of charity*) をするゆとりなどない。こうして家族と家族が嫉妬心や猜疑心に満ちた関係に陥るだけではなく、家族内での家族の連帯も危うく対等ではなくなる。たとえば父親の命令で長男が妹の婚資を稼ぐために徒弟奉公にだされることもある。父親には長男を犠牲にしてでも娘に良い嫁ぎ先を見つける方が利益なるからだ。また結婚を機に親子の力関係が逆転することもよくある。家族といえども利益や力関係に左右される戦場となりうるのだとする。

そうなると、じつは *amoral familist* は正確にいうならば *amoral individual* であり、*amoral familism* という概念が成立しないことになる。それはさておき、バンフィールドはこう続ける。叔父や叔母、従兄弟(従姉妹)との関係は利害関係が絡まないかぎりには比較的良好だが、たいていは家に招待したり不在時に鍵を預けたりすることはない。洗礼に立ち会った名付け親 (*godparents*, : *compare, comare*) との関係も大切だが絶対的に信頼できるとはいえない。友人や隣人も潜在的には厄介で危険だ。要するにホッブズが *Leviathan* でいう *war of all against all* の感覚が、モンテグラノーの住民たちの基本的な心理学的な性格を導きだしたのである。

それにしても、これほどまでに極端な不安傾向 (apprehensiveness) はどこから生まれたのか。彼は TAT の被験者16人中15人までが、幼児の死亡 (premature death) や肉親の死亡を目撃するという体験をあげていたことを重視する。いずれにせよ死亡率の高さがその背景にあることだけは間違いないとする。それとともに彼は拡大家族 (extended family) がなかったことをもう一つの原因としてあげる。なぜならば、もし祖父や祖母、叔父や叔母が同居していたならば、肉親や家族の死による子どもの精神的なショックも緩和されるだけではなく、家族の一員として暮らし続けることができるかぎりには生活上の不安も払拭してくれるからだという。したがって彼の見解は、イタリア南部の家族は拡大家族だとし、そうした家族における家父長主義が後進的な精神構造の原因だとするステレオ・タイプのイタリア南部像とかなり異なったものとなっている。

ところで政治学者としてのバンフィールド (1916-99年) が、シカゴ大学在任中にはレオ・シュトラウスやミルトン・フリードマンといったネオ・コンサーヴァティヴないし新自由主義者との深い交友関係をもち、1959年にハーヴァード大学に移ってからはニクソン、フォード、レーガンの3人の大統領顧問をも務めることになる熱心な共和党支持者であり、*Unheavenly City. The Nature and the Future of Our City* (Boston: Little Brown 1970) では、都市暴動は人種問題ではなく、暴動を起こすような「下層階級」には刹那的な快楽に自足するような貧民もおり、そういった貧民に社会的扶助を行っても、彼らの生活条件を向上させることはないとして物議を醸したことはよく知られている。頑強な反共主義者であるバンフィールドがマッカーシズムの絶頂期の1954年に現地調査を始めたことからしても、彼の令名を高めたこの南イタリアの研究が今となれば信じがたいほどの bias に満ちたものであることはあえて指摘するまでもないであろう。そればかりか偏執狂的 paranoiac といってもよいほど、貧農の行動の原因を社会経済的条件や社会階級関係によって説明することを拒否し、自分の都合の悪いデータは否定的に解釈することによって、すべての問題を諸個人の心理的文化的倫理的な態度の問題に還元しようとするのである。

本書について、イタリア語訳版 (*Le basi morali di una società arretrata*, Bologna: Il Mulino, 1976) には、イタリア内外の9人の研究者が執筆した書評の抜粋がイタリア語訳されて再録されている。そして多くの書評もそのことを指摘する。ある評者の言葉をもちいるならば、彼は「方法論の罠」(trappola metodologica) に捕らえられて循環論法に陥っている。そもそもどんな家族をどんな規準で被験者に選んだかでさえ明らかにされていない。(Alessio Colombis, “Il familismo amorale visto da un familista”)

また別の評者は、ユタ州セント・ジョージの事例との比較からの印象から分

析を始めるというように著しく *ethnocentric* な方法を用いながら、その一方で被験者が述べた言葉を鵜呑みにして、それに詳細な社会学的吟味を加えることもなく、そのまま記述するという点で、あまりにも *indigenous* であり、これを社会学的な分析と呼ぶことはできないとする。そして *familism* といって家族を独立変数 *independent variable* として扱っているが、家族の役割や機能も社会的文脈のなかで定義されるとともに変化する従属変数であるという重大な事実を忘れていると批判した (John Davis, “*Principi morali e arretratezza*”).

なかでも最も辛辣な批判を行っているのは、1924年の生まれでトリノ大学を卒業後パリの *École des Hautes Études en Sciences Sociales* に学び、テヘラン大学、ウルビーノ大学、オックスフォード大学、ミラノ大学、ハーヴァード大学、*European University Institute* の教授を歴任したイタリアの著名な社会学者 *Alessandro Pizzorno* である (“*Familismo amorale e marginalità storica ovvero perché non c'è niente da fare*”).

ピッツォルノは、バンフィールドがいう「核家族の物質的短期的利得を極大化すること」と「他のだれもおなじようにふるまうと想定すること」という一般法則は、*Adam Smith* が *The Wealth of Nations* (1776) で観察した18世紀の英国社会のブルジョワジーにもそのままあてはまるという。

しかしバンフィールドは「物質的で短期的な利益」(*material short-run advantage*) と直感的に述べているだけで「物質的」と「短期的」との違いをきちんと考えていないと批判する。そこで、まず「物質的」とはモンテグラノーの住民にとっては「消費」に関わるものだとする。それゆえ「物質的利得」とは夫婦家族の消費の拡大を可能とすることを意味する。他方、「短期的利得」とはバンフィールドの記述からは、実が熟すのが待ちきれないで摘んでしまうといった「時間」に関するのではなく、自らの行為がもたらす結果についての予期能力の欠如といった「論理」に関することをいっているのだと考えられる。おそらくバンフィールドはこの点で *amoral familist* と英国ブルジョワジーの通常の「経済人」(*homo economicus*) とは違うと考えているのだと想定しうる。

だが、もしそうだとすると、「短期的利得」の追求は「物質的利得」の追求すなわち「消費の拡大」という目標とは矛盾することになる。いいかえると *amoral familist* は「物質的利得」を追求していないことになる。バンフィールドは彼らが他人の嫉妬心や悪口を恐れて「短期的利得」の獲得に走るというが、嫉妬されたからといって物質的な財の消費が奪われるわけではない。このように述べてバンフィールドのいう *amoral familist* という概念自体が本質的な矛盾を含むものであり、そもそも現実には成り立たない概念だと批判する。

そのうえでバンフィールドの南イタリアについての基本的な無知を指摘する。

イタリア南部の地域研究においては、たんなる夫婦核家族 (*nucleo coniugale*) を越えた拡大親族関係 (*rapporto di parentela allargata*)、代父関係 (*rapporti di comparatico*)、土地所有と緊密に結合した家父長主義的な従属関係 (*vincolo paternalistico*) がきわめて重要な意味を持つことがよく知られている。しかしバンフィールドのいう *amoral familism* の下ではこうした *clientelism* の基底をなす諸関係がまったく存在しえないという奇妙なことになっている。モンテグラノーのようなところでは、拡大親族関係や代父関係は、「個人を超越する行動」 (*azione extra-individuale*) を可能とする唯一のカテゴリーであるばかりか、「前-政党的」 (*pre-partitico*) で原初的な政治活動の基盤を提供するものなのである。

そして比較が成り立たないものを比較していると批判する。そもそもモンテグラノーはユタ州のセント・ジョージのようなモルモン教徒たちによって新天地に新たに建設された誓約団体的な性格をもつコミュニティ（共同体）ではない。またイタリアには英米法の国々で想定される私的な市民ないし利益団体が自治体職員と直接交渉を行うという慣習がない。ローマ法の伝統や後にはナポレオン法典の影響を受けた集権的で万民法的な公行政観念が優越する国である。だからモンテグラノーの住民はバンフィールドが期待するような自発的な結社にもとづく協同的な行動をとらないのである。それが役に立たないことを熟知しているからである。ただしバンフィールドのいうような彼らの後進的で退嬰的な *ethos* がそうさせるのではない。彼らの合理的選択がそうさせるのである。

いずれにせよバンフィールドのいうように *amoral familism* がモンテグラノーの住民の *ethos* だとするならば、いくら悲惨な状態から抜け出したくても、彼らには「なににもなすすべがない」 (*non c'è niente da fare*) ということになる。モンテグラノーはまるで地霊によって呪われたとき神話的な土地となってしまう。バンフィールドは *amoral familism* という概念の創造によってイタリア（南部）をめぐる言説に新たなステレオ・タイプを書き加えることに成功したのである。

#### 4. Making Democracy Work. Civic Traditions in Italy

バンフィールドがモンテグラノーで現地調査を行ったのはイタリアが「経済の奇跡」 (*Economic Miracle* : 1958-63年) と呼ばれる高度成長を遂げる以前のことであり、戦後再建期直後の教育の大衆化や社会の世俗化がまだ十分に進展していない時代のことであった。その時の印象にもとづいて創られたステレオ・タイプが、アーモンドやヴァーバのいう「疎外された政治文化」にも継承されたことから分かるように、その後もイタリアの高度成長やそれにとまなう大

きな社会変動や文化変容とは無関係に、独り歩きしつづけた。それはあたかも若い時に撮った身分証明写真が、すでに何年も経って色褪せてしまったのに、まだ使われているようなものであった。ところがイタリアにいわゆる「第二共和制」(La seconda Repubblica)と呼ばれることになる政治的な大変動が始まろうとする、まさにそのようなときに、本質的にはこうしたステレオ・タイプをなぞったとしかいいようのない著作の刊行をみることになったのである。すなわち Robert D. Putnam, *Making Democracy Work. Civic Traditions in Modern Italy* (Princeton: Princeton University Press, 1993) である。

1948年のイタリア共和国憲法は第115条において「州が憲法の定める諸原則に従って固有の権限と機能を有する自治体として制定される」と定めていた。ところがシチリア、サルデーニャ、トレンティーノ・アルト・アディジェ、フリウリ・ヴェネツィア・ジューリア、ヴァッレ・ダオスタといった分離主義や少数民族問題を抱える辺境地帯や島嶼部には5つの「特別州」が制定されたが、人口の85%が居住するそれ以外の地域では、この憲法規定は長きにわたり無視されてきた。それが1970年になり、憲法第75条によって制定が定められながら同様に放置されてきた国民投票制(referendum)とともに実現の運びとなった。

イタリアは西欧諸国では最高の経済成長率(年率6.3%)を達成するという高度成長を遂げ、1955-71年には914万人もの人々が国内を移動するという革命的ともいえる社会変動が生じるとともに、農業労働力人口は42%から17%に激減した。折しもキリスト教民主党は1962年以降社会党と連立する中道左派路線に転換するが、1968年の学生反乱が契機となって翌69年には後に「熱い秋」(autunno caldo)と呼ばれる労働者の激しい抗議運動が勃発した。こうした対立を緩和するための改革の一つとして中道左派政権は15の「普通州」を制定するに至ったのである。ところが1970年6月の第1回州議会選挙では「赤い地域」(zona rossa)と呼ばれる中部イタリアのエミリア・ロマーニャ、トスカーナ、ウンブリアの3州において共産党を主体とする州政府が誕生した。キリスト教民主党が憲法第115条の実施を躊躇ってきたのはこういった事態を恐れていたからであった。

ところで、イタリアにおける州制度の発足は、「制度が政治を形成する」(Institutions shape politics)そして「制度は歴史が形成する」(Institutions are shaped by history)とする歴史的新制度論 new institutionalism の観点からみて、ゲームの規則の変更が制度にどのような効果をもたらすのかを検証する絶好の機会であると考えられた。そこでパットナムは Roberto Leonardi と Raffaella Nanetti という2人の協力者を得て実におよそ20年もの長きに及ぶ現地調査を実施した(具体的には、①4期にわたる6州の州議会議員に対する面接、②3

期にわたる上記議員の面接と全国の地域指導者に対する郵送による調査、③6回にわたり委託した全国有権者調査、④全20州の統計分析、⑤市民相談に対する州政府の対応調査、⑥全20州の州法の分析と6州の政策・地域計画の事例研究。なお上記6州とはロンバルディア、ヴェネト、エミリア・ロマーニャ、ラツィオ、プーリア、バジリカータである)。

こうした長期にわたる調査から次のような結果が得られたとする。とりわけ州の政治エリート(州議会議員)や地域指導者の調査をとおして、20年のあいだに「新たな政治手法」(a new way of doing politics)が成立したことを認めることができるという。いいかえると顕著な脱イデオロギー的分極化(ideological depolarization)と政治に対する寛容かつ協力的なプラグマティズム(tolerant collaborative pragmatism)の増大が見られるとする。それは①州議会議員の選挙による交代、②全国レベルの政治によるものではなく、明らかに③制度的な社会化(institutional socialization)の結果だとする。そして、このような「新たな政治手法」もたらしたゆえに州制度改革は成功したのだという。

だが、ここでは著者があえて軽視した②全国レベルの政治の方を強調したい。イタリア共産党は1973年にエンリコ・ベルリングエル書記長の下でキリスト教民主党との「歴史的妥協」(compromesso storico)を唱え、1976年総選挙では史上最高の34.4%の得票率(キリスト教民主党は38.7%)を獲得し、6州の州議会でも多数派となり、トリノ、ミラノ、ローマ、ナポリなど主要都市の市議会をも制覇した。そして1978年には国民連帯(solidarietà nazionale)政府においてキリスト教民主党単独のジュリオ・アンドレオッティ政権に閣外協力をするまでとなった。この時期の共産党は、後に consociationalism (なれあい政治)と批判され、1993年の国民投票で激しい批判を浴びることになる「政党支配体制」(partitocrazia)の一翼と見なされるほどプラグマティックで妥協的な政治を追求していた。こうした全国政治の文脈を無視して、州のエリートたちの脱イデオロギー的分極化を語ることはできないであろう。

これに続いて著者は制度パフォーマンスの測定をする。すなわち12の指標から制度の成績評価をする(①州政府の安定性、②迅速な予算執行、③統計情報サービス、④改革立法、⑤立法のイノベーション、⑥保育施設、⑦家庭医、⑧産業政策手段、⑨農業支出能力、⑩地域保健機構(USL: Unità Sanitaria Locale)支出、⑪住宅と都市開発、⑫官僚による応答性)。

その結果、制度の成績はイタリアの南部諸州では北中部諸州と比べ顕著に劣るという。また、こうした客観的(objective)な成績評価は住民や地域エリートによる評価(assessment)からも確認できるという。

ここで指摘すべき重要なことがある。それは、第2章において州エリートや

地域指導者の長期的な多面的調査から新制度がもたらした「政治的社会化」の一般的な効果を認めていたにもかかわらず、第4章では、そうした自らの調査結果や結論を考慮に入れることなく、制度の成績評価の差異を説明する要因としていきなり南北間のクリーヴィッジ cleavage 論を導入し、そして「何が北部の成功した諸州と南部の成功しなかった諸州との違いをもたらしたのか」とあらためて別の問いを立て直していることである。

そればかりか、その原因についても驚くほど性急に二者択一的な仮説を提示する（それ以外の解釈仮説はありえないと断定する）。その一つは社会経済的近代性（産業革命の諸結果）、もう一つは civic community (patterns of civic involvement and social solidarity) である。そして、これまた驚くほど性急に、前者の解釈仮説を否定する。著者は、経済的近代性に関して、1970-77年（なぜこの時期が選ばれたのかの説明はない）における①一人当たり所得、②州の総生産力、③労働力の農業・工業間分布、④付加価値の農業・工業間分布（なぜこの4項目が選ばれたのかの説明もない）をもとにした因子スコアと制度の成績との相関関係を調べてみたところ、これでは制度の成績の南北格差が説明できないという。つまり制度の成績と経済発展や豊かさとのあいだには必ずしも相関関係はないとする。こうして南北格差の原因を政治文化の問題へと一気に転轍していく。すなわち civic community の有無に原因を求めていくのである。

ここで著者が civic community の理論的考察を進めていく上で全面的に依拠するのは、1924年にニュージーランドに生まれたジョンズ・ホプキンス大学教授 John G.A. Pocock, *The Machiavellian Moment. Florentine Political Tradition and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton: Princeton University Press, 1975) である。16世紀のルネサンス期フィレンツェで共和政の栄華盛衰を論じたニッコロ・マキャヴェッリとその同時代人たちは、共和政すなわち自由な諸制度の成否は civic virtue の有無に左右されるとした。ポーコックはこうした civic humanism の伝統がマキャヴェッリから17世紀のイギリスを経てアメリカ建国の父祖たちの間にまで継承されていったとする。いいかえるとホッブズ、ロックを経由した自由主義とは異なる共和主義の伝統が英米思想にも脈々と流れていくと考える。共和主義の再発見は、communitarianism の立場を導きだすことになり、その立場から古典的な individualistic liberalism を批判したことで大きな論争を引き起こした。この論争については、Robert Bellah et al, *Habits of the Heart* (NY: Harper & Row, 1986) あるいは Alasdair MacIntyre, *After Virtue* (Notre Dame: Notre Dame University Press, 1981) を思い出すだけでも十分であろう。そしてパットナムも civic humanism の伝統を継承したとする

communitarian の立場からこうした論争に参加しようと考えた。ただし、思想家ないし思想史家としてではなく、アーモンドとヴァーバを嚆矢とする政治文化論が開発した手法を用いて参加するとしていたのである。

そこで著者は civic community を 4 つの理論的な領域に分けて検討するという。すなわち①civic engagement、②political equality、③solidarity, trust, tolerance、④associations: social structures of cooperationである。そして、これについても具体的なデータに基づく実証的検証を加えていく。しかし、それまでとは違って、なぜか 4 つの領域ごとの分析ではなく、civic community についての総合的な分析が行われる。すなわち新聞購読率やスポーツクラブなどの余暇団体への参加を指標に取り上げる。それとともに国民投票の投票率と優先投票の投票率を取り上げて測定することで civic community の有無すなわち civicism を比較するための指標とする。選挙結果は党派性と clientelism の 2 つの bias がかかっているので civicism の測定には相応しくないという。

だが、それならばなぜ優先投票 preference voting を取り上げたのであろうか。これは1993年以前の比例代表制に基づく旧選挙法によるもので政党の候補者名簿から 3 - 4 人（人数は選挙区毎に異なる）に対して優先票を投じることが可能とされていた。これは特定候補者に対する clientelism による忠誠の表明とされ政治腐敗の象徴とされてきた。そのため1991年の国民投票によって廃止される。

しかしパットナムはこの優先投票の投票率を non-civism の指標となりうると考えたのである。つまり優先投票の投票率が高い州は clientelism と政治腐敗の水準が高いと考えた。だが優先投票の投票率が低い州が civic virtue を有する civicism の高い地域であると証明されるわけでは必ずしもない。いいかえるとパットナムは civicism それ自体を測る指標とデータを示していないのである。

それにもかかわらず優先投票、国民投票、新聞購読率、余暇団体からなる 4 つの因子の合成によって civic community index すなわち civicism を導きだし、それが各州の制度の成績と著しい相関関係があるとした。そして、civic community index の得点の高い州はすべて北中部にあり、その逆に得点の低い州はすべて南部にあるという、驚くべき事実が判明したというのである。

ここであらためて、パットナムの所期の研究目的が州制度の経験的な実証研究にあったことを思い出すのも無駄ではないだろう。しかしパットナムは所期の研究目的をはるかに越えて、civic community のルーツを探るという歴史研究の世界へと大胆にも突き進んでいくのである。そしてイタリア半島に1100年頃に出現した二つの政治体制が南北の分岐点となったとした。

すなわち北部では自治的な都市国家が出現し南部では専制的なノルマン王国



が成立したことである。いわばこれが「原罪」(original sin) となってその後の南北の運命を分けることになった。その後南部では土地貴族が封建的支配を樹立するが、社会の底辺では大量の貧農が悲惨な生活を余儀なくされる。他方、北中部では自発的結社 voluntary association を起源とし vertical hierarchy ではなく horizontal collaboration に依拠する commune/ comune の発達を見た。こうして14世紀の初めには北部の communal republicanism と南部の feudal autocracy という完全に異なる二つの統治パターンが確立したという。もちろん、その後には様々な紆余曲折があったが、二つの統治パターンは何世紀もの長きにわたって存続し、南北間の相違はイタリアの国家統一が実現される19世紀においても変わることはなかったとする。

それにしてもイタリアの歴史を少しでも知る者にとっては、空恐ろしいといえるほど短絡的な歴史解釈である。例えばイタリアの都市国家がコンタードと呼ばれる周辺領域では封建的支配を行っており近代の共和国とは程遠いものであることは中世史研究者の常識である。またフィレンツェの共和政が僭主政 signoria に転じていったことはマキャヴェッリの読者ならば知らないはずがない。さらにイタリア半島は16世紀になるとヴェネツィア共和国と教皇国家を除いてスペイン・ハプスブルク家の支配下に陥ってしまう。著者は feudalism と autocracy を同一視するが南部に強力な専制君主が存在したという事実はない。また南部には救済事業 opera pia、慈善施設 istituti di beneficenza、信心会 confraternità、同業組合 corporazione といった social solidarity を表現する association が皆無だったとするがこれも事実と反する。だが、もうこれ以上、著者の牽強附会ぶりを指摘する必要はないであろう。

しかし著者は、州ごとの経験的データが得られる19世紀以降について、あらためて civic tradition の耐久性 durability を測定しようとする。その数量的指標とされたのは、①互助会会員数(1873-1904年)、②協同組合組合員数(1889-1915年)、③大衆政党の強度(1919-21年)、④総選挙投票率(1919-21年)、⑤地域結社の存続年数(1860年以前)である。

ちなみに大衆政党とは社会党とカトリック政党である人民党である。前者がなかんずく中部の農業賃労働者、後者が北部の小自作農や折半小作農を農民組合、協同組合、互助会、余暇組織などのサブカルチャー的ネットワークを構築していたことはよく知られている。そして1919年に新たに導入された比例代表制によって大躍進を遂げたのである。こうしたデータから得られる答えは明らかである。いうまでもなく、そこから得られた1世紀まえの civic involvement index と現代の civic community index との間に強い相関関係があることが証明されたとした。またしても南北格差が再確認されたのである。

ここにきてやっとパットナムの令名を高めた *social capital* 論が登場する。著者は、ここで南部における *civic involvement* の伝統の欠如をゲーム論という *collective action* のジレンマと考える。その限りにおいてはピッツォルノのバンフィールド批判に通じるところがある。なぜならばピッツォルノはホッブズ的世界に生きるモンテグラノーの農民が協力的行為を行わないのは彼らの *ethos* ではなく合理的選択によると考えていたからである。それでは、こうした囚人のジレンマが存在するような世界でそれを克服することは何によって可能となるのか。それはゲームが行われる社会的文脈によるという。すなわち、*civic engagement*、*trust*、*norm of reciprocity*、*network* といった形をとって表わされる社会資本を蓄積した *civic community* では *voluntary cooperation* が行われやすくなるのだとした。

こうして著者は議論をゲーム論という著しく一般的な理論的地平へと転轍していく。それにもかかわらず結論はきわめて単純である。社会資本の蓄積がある北部では州制度改革は成功したが、それを欠く南部ではそれに失敗したのである。それゆえ *civic virtue* の意義を強調したマキアヴェッリ、*civil society* の意義を強調したトックヴィルは正しかった。そもそも *civic involvement* の伝統すなわち社会資本がないところでは改革のゲームの成功はおぼつかない。しかも社会資本は長い歴史の賜物である。それがイタリアからの教訓である。

パットナムの著作を読みながら覚えるひどい徒労感の原因は、おそらくは、彼が論点をそれこそ *vertical* な形で累積的に重ねていく、あるいは重層的に掘り下げていくのではなく、*horizontal* な形で横にずらして平行移動していくことにある。しかも議論の進行に応じて生じる新たな論点に合わせて理論的かつ方法論的な問題意識がずれて変化し、それに応じた仮説が提起されるたびに、また新たに選ばれた別の数量的指標を用いた経験的な分析が行われ、その分析結果についてはその前に用いた数量的データとの相関関係のみが問題とされるだけで、数量データあいだの直接的な関連が明らかにされることは一切ない。永遠の循環論法 *vicious circle* といわざるをえない。あるいはステレオ・タイプの罫といいかえてもよい。経験的分析と称していても、すでに予め答えがあり、それを論証しよとしているにすぎないからである。

それにしても20年にも及ぶ長期の調査や観察の成果が、本書では一体いかなる形で活かされたというのであろうか。おしむらくは、もしこれが本来の意味での人類学的な *ethnography* であるならば、もしこれが *Negara. The Theatre State in Nineteenth Century Bali* (Princeton: Princeton University Press, 1980) を著した Clifford Geertz のような意味でのイタリアをめぐる *thick description* であるならば、おそらくはその当然の前提としての歴史研究からも得られ

たであろう膨大な文献史料をも踏まえることによって、新たな知見の発見とそれを踏まえたもっと斬新な理論仮説の提起がなされたにちがいない。

著者は、社会資本の構築には歴史が決定的に重要な要素だといいつつ、じつは歴史を重視していない。なかんずく近現代の政治史を軽視している。著者が *civic community* の典型としてきたのは、イタリア共産党による善政 (*buongoverno*) のショウ・ウインドウといわれてきた州都ボローニャがあるエミリア・ロマーニャ州だった。この地域は共産党が冷戦後の紆余曲折を経て2007年に民主党となった今でも、旧共産党と結びついた労働組合や協同組合などのサブカルチャー組織のネットワークが生き続ける「赤い地帯」(*zona rossa*) である。しかも1920年代には農村ファシズムによる懲罰行動 *squadristo* の嵐が席卷し、ファシズム末期には反ファシスト・パルチザン武装闘争が展開されるという激しい政治イデオロギー的対立の歴史の記憶をもつ地域である。パットナムは、この州にもっとも高い制度のパフォーマンスと *civicness* を認めるにもかかわらず、なぜこの地域の近現代政治史を正面から論じようとしなかったのであろうか。

パットナムが高く評価したエミリア・ロマーニャ州の *civic community* は12世紀に起源を持つ歴史遺産というよりも、著者が調査を始めるたかだか25年ほど前に展開された熾烈なレジスタンス闘争の賜物であるといっても過言ではない。パットナムが堂々巡りのような経験的実証による循環論証の罠に陥っていたのは、ひょっとすると *civic republicanism* の伝統がイタリア共産党によって継承されたという結論を回避したかったからではないだろうか。

もう一つ本書には重大な疑問がある。それは南部についてである。パットナムが南部で実際に調査したのはプーリアとバジリカータだけである。どうしてシチリアやカンパーニアを調査しなかったのか不思議でならない。南部は一つではなく大きな地域差や多様性があることを完全に無視している。もちろん本書は地域研究ではないのだから当然ともいえる。しかし、もし本書の目的が社会資本の理論にある以上は経験的データが少し不正確でも誤っていてもやむをえないというのであれば、本書の経験的な実証研究の意味はすべて失われる。本書はあくまでも理論の経験的な実証を標榜するものだからである。それゆえ著者にはできる限り正確で豊富なデータの収集に努める義務があったはずだ。だが、おそらく著者は南部の「現実」を本当に知りたかったのではなく、南部という「表象」を示すデータさえ入手できればそれで十分だったのであろう。南部というステレオ・タイプ化された「表象」のパターンが、統計処理が可能な数量データによって確認できればそれでよかったのである。

イタリアの「南部」(*Mezzogiorno*) をめぐる表象についてはすでに膨大な研

究の蓄積がある。19世紀の国民国家建設と国民アイデンティティ構築の過程において南部がイタリア内部の「他者」(otherness)の集合的表象となり偏見と差別の対象となったこともよく知られている。国家統一以前の長期にわたるイタリア「民族」の不在と分裂と対立はイタリア人自身によるイタリアについての著しく否定的かつ悲観的で自嘲的な劣等感に満ちた自画像を数多く生み出してきた。それが国家統一以降は「南部問題」(questione meridionale)の発見によって、そうした否定的な表象の多くが今度は「南部」に対して過剰なまでに投射されることになった。イタリア人の悪徳と野蛮のすべてが「南部」に転移され、北中部のイタリア人は美德あふれる文明国の市民となる資格を得ることになった。北中部のイタリア人だけが晴れてヨーロッパ人(アーリア人?)になることができた。こうしてイタリアのなかに新たに南北の国境線が引かれることになり、ローマ以南は「アフリカ」になぞらえられることになったのである。

そればかりか二項対立図式に単純化された南部人に対する偏見は、チェーザレ・ロンブローゾを始祖とする犯罪人類学 *criminology* という頭蓋骨の形態的分類の統計的处理にもとづく実証科学と結びつくことによって生物学的な人種理論にまで高められていく。南部人の卑屈と傲慢、怠惰と激情、迷信と偏見といった女性的!な性格は「地中海人種」に特有の病理性を示すものであり、潜在的な犯罪者気質の現われだとした。マフィアやカモッラなどの暴力的な犯罪組織の存在が犯罪人類学によっても裏付けられることになったのである。

パットナムの著作がでたころ、そこにも少し触れられているが、イタリア北部では若きカリスマ的指導者のウンベルト・ボッシに率いられたロンバルディア同盟(Lega Lombarda)が大躍進を遂げつつあった。1990年にはロンバルディア州議会選挙で19%の得票を得て第二党となる。1991年には他の地域主義運動を併合して北部同盟(Lega Nord)となり、1992年総選挙において上院では8.2%(25議席)、下院では8.6%(55議席)を獲得するまでとなった。ボッシは方言や庶民的な言葉遣いで差別発言や大衆扇動を意図的に繰り返すことによってマスメディアの注目を集めるようとするポピュリスト・デマゴグであった。そしてイタリアの国家統一を全否定するばかりか北部・中部・南部の3分割論を唱えた。その一方で「南部人は泥棒」(terrone è ladrone)といった人種差別的言辞を用いて南部人を激しく攻撃した。

さらに1996年には北部の分離独立論を唱えてヴァーチャルな「パダーニア共和国」の独立まで宣言した。そもそも歴史的にはパダーニアという地理的名称など存在しない。ポー川 Po の形容詞 *padano* から創られた新造語にすぎない。それではパダーニア人とは誰のことか。それは北部の *civic community* に暮ら

す人々である。それは中世自治都市に起源を持つ *civic tradition* を持つ人たちである。実際、ボッシのロンバルディア同盟は、1167年に神聖ローマ皇帝フリードリヒ 1 世赤髭王（バルバロッサ）に勝利した北イタリア自治都市同盟の名称である *Lega Lombarda* をそのまま借用したものであった。パットナムの著作がイタリア中世自治都市に *civic tradition* の起源があるとしたことは、ボッシの地域分離主義運動にとって好都合きわまりない理論的な裏付けとなった。

パットナムは *civic community* を、①*civic engagement*、②*political equality*、③*solidarity, trust, tolerance*、④*associations: social structure of cooperation* によって説明できるとした。それではボッシの率いる北部同盟は、参加、平等、連帯、信頼、寛容、協力のどれに該当するといえるのであろうか。それとも、ひょっとするとパットナムは、そもそも *civic community* というものが、中世のイタリアのように他の都市民や他国人といった何らかの「他者」の「排除」を前提として成立するものであると考えていたのであろうか。だがボッシのこのような人種差別的で不寛容な南部人排斥論にもとづく地方分権論や連邦主義を *civic tradition* や *civic republicanism* と呼んでよいものなのであろうか。

たしかに1980年のイタリアではトリノ、ミラノ、ジェノヴァの工業の三角地帯に代わって、北部のヴェネト州、ロンバルディア州、中部のエミリア・ロマーニャ州、トスカーナ州に散在する数多くの地方都市において、輸出向けの多品種少量生産に特化した水平的分業を行う中小企業群からなる地場産業地域が大発展を遂げた。それは「第3のイタリア」（*Terza Italia*）と呼ばれ「黄金の80年代」（*anni dorati ottanta*）といわれる好景気をもたらした。このような地域経済の活性化には地方都市が育んできた職人的伝統や近隣共同体的ネットワークが大きな役割を果たしたといわれ、これに対してまさに「社会資本」という概念が適用されることになった。

しかしボッシの北部同盟の運動は、こうした職人や農民や労働者出身のたたき上げの成功者である中小企業の経営者たちによる、非効率的で腐敗した中央の政府や行政に対する「納税者の反乱」という性格を色濃く帯びていた。彼らが、不法移民などの違法労働力の雇用によって最低賃金の支払いや社会保険料負担を免れようとしたばかりか、脱税や節税にも務めてきたことは広く知られている。

ところが経済生活はともかく市民生活において「社会資本」が機能していたとは到底いいがたかったのである。ここでいわれる「社会資本」は同時に、強欲、利己心、排除、差別、不寛容のコミュニティ・ネットワークを構成するものでもあった。いいかえると、まさにバンフィールドのいった *amoral familist* ならぬ *amoral entrepreneur* が築いた自分たちの同業組合的利益を擁護するため

のコミュニティ・ネットワークに他ならなかったのである。

ここではボッシの北部同盟だけを取り上げたが、1992年に始まる政治改革の失敗や、およそ *civiness* を体現しているとはいい難いミラノ出身（北部人！）の政治家シルヴィオ・ベルルスコーニのおよそ15年にもおよぶ「長期支配」（ジョヴァンニ・サルトーリ教授によれば「スルタン支配」 *sultanato*）を目の当たりにするにつけ、パットナムの議論はことイタリアに関する限り見事に裏切られたといわざるをえない。パットナムも *Bowling Alone. The Collapse and Revival of American Community* (NY: Simon & Schuster, 2000) ですでに認めたように *civic culture* は今や本家本元のアメリカ合衆国ですら危うい文化となつてしまったようである。私たちはあらためて *civic community* を求めて遠い旅に出なければならないのかもしれない。

\* 本稿は2009年度・比較政治学会・分科会 C「市民参加の比較政治学—Civic Culture at 50—」における報告にもとづいて作成されたものである。

## References and Notes

### 1. Representations on Italy

#### (1) White Men

E. M. Forster, *Where Angels Fear to Tread* (1905)

Id., *A Room with a View* (1908)

Id., *A Passage to India* (1924)

Id. *Two Cheers for Democracy* (1951)

\*Edgar Morgan Forster (1879-1970) Cambridge, King's College Honorary Fellow in 1947; Edward W. Said, "Style, Expertise, Vision: *Orientalism's Worldliness*," *Orientalism* (New York Vintage, 1979), chap 3, II.

#### (2) Are Italians white?

Jennifer Guglielmo & Salvatore Salerno, *Are Italians white?* (NY. Routledge, 2003)

Thomas A. Guglielmo, *White on Arrival. Italians, Race, Color, and Power in Chicago* (Oxford University Press, 2003)

Salvatore J. LaGumina, *Wop! A Documentary History of Anti-Italian Discrimination* (NY, Straight Arrow, 1973)

#### (3) Mafia

Daniel Bell, "Crime as an American Way of Life," *The End of Ideology* (Harvard University Press, 1960)

Hubert S. Nelli, *The Business of Crime. Italians and Syndicate Crime in the United States* (The University of Chicago Press, 1976)

George De Stefano, *An Offer We Can't Refuse. The Mafia in the Mind of America* (NY, Faber & Faber, 2006)

Salvatore Lupo, *Quando la mafia trovò l'America. Storia di un intreccio internazionale, 1888-2008* (Torino, Einaudi, 2008)

\*Brian De Palma, Al Pacino's "Scarface"(1983)

\*\*Roberto Saviano, *Gomorra. Viaggio nell'impero economico e nel sogno di dominio della camorra* (Milano, Mondadori, 2006)

### 2. Civic Culture

#### (1) Civic Republicanism

"The classical, aristocratic conception of the disinterested man, motivated by public concern, not petty drives and desires. Freed from the lowly labour of the household he could participate in the public realm and conduct the affairs of state. Through political engagement self-fulfillment and civic virtue could be achieved."

Jude Bloomfield, “The “Civic in Europe,” *Contemporary European History*, 4, 2 (1995), pp.223-240.

(2) Republics as Mixed Government

“In such republics of the Roman kind, he sees essential elements, “qualità” (a word with some social connotations), or “Potenza”, forces or tendencies. These are la potestà regia (regal power), la Potenza degli Ottimati (the influence of elites, plutocrats or the power hungry) and il governo popolare (“popular government”, or is it “government of people”? Not quite, the connotation is more like in our “the governor” on a lorry or other engine, the ultimate restraining force, the final limitation—but also, as we will see, the real power, both civic and military, behind republics—as distinct from principalities—if managed shrewdly by the Ottimati in a political manner, not by simple coercion).” Bernard Crick, Introduction, Niccolò Machiavelli, *The Discourses* [*Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio* (1515)] (London, Penguin, 1983), pp.27-28.

(3) Eyes of the British Empire’s photographers

The tautological reconfirmation of the stereotype on Italian representations: United Kingdom: civic culture as mixed political culture; Italy: alienated political culture as a counter-model of the less-developed society, Gabriel Almond & Sidney Verba, *The Civic Culture: Political Attitude and Democracy in Five Nations* (Princeton University Press, 1963)

Cf. Sidney Tarrow, *Peasant Communism in Southern Italy* (Yale University Press, 1962)

### 3. A myth of amoral familism

(1) “In democratic countries, the knowledge of how to form associations is the mother of all knowledge since the success of all the others depends upon it” Alexis De Tocqueville, *Democracy in America* (1835 and 1840), vol.2, part 2, chap.5,.

\* St. George, in Utah v.s. Montegrano (Chiaromonte) in Basilicata.

(2) “Christ did stop at Eboli, where the road and the railway leave the coast of Salerno, and turn into the desolate reaches of Lucania. Christ never came this far, nor did time, nor the individual soul, nor hope, nor the relation of cause to effect, nor reason nor history(...) But to this shadowy land, that knows neither sin nor redemption from sin, where evil is not moral but is only the pain residing forever in earthly things, Christ did not come. *Christ stopped at Eboli.*”



Cf. Carlo Levi, *Christ Stopped at Eboli* (London, Penguin, 2007, 1st ed. in 1947), p.4

(3) “Maximize the material, short-run advantage of the nuclear family; assume that all others will do likewise.” “One whose behavior is consistent with this rule will be called an “amoral familist.” Edward Banfield, *The Moral Basis of a Backward Society* (NY, Free Press, 1958), p.83.

\*Id., *Unheavenly City. The Nature and the Future of Our City*, (Boston, Little Brown, 1970)

\*\*Alessandro Pizzorno, “Familismo amorale e marginalità storica ovvero perché non c’è niente da fare.” *Quaderni di Sociologia*, 3(1967), pp.247-261.

4. Robert Putnam, *Making Democracy Work. Civic Tradition in Modern Italy* (Princeton University Press, 1993),.

(1) La fotografia degli anni Cinquanta “All’inizio degli anni Novanta, poi, in seguito anche alla vicenda di «Mani purite», l’antica geografia elettorale viene sconvolta, con il crollo dei vecchi partiti e l’emergere di nuovi soggetti politici; si apre la strada agli incerti destini della «seconda repubblica». “Eppure l’immagine anomala e «anomica» della cultura politica italiana—con quei tratti di incivismo, isolamento e disgregazione sociale colti nella «fotografia» degli anni Cinquanta—continua a esserle un elemento di paragone, in negativo naturalmente, anche oggi,” Loredana Sciolla, *La sfida dei valori* (Bologna, il Mulino, 2004), p.13.

(2) “*Making Democracy Work* reads like a stratified rock formation of U.S. political science over the last three decades: from the behavioral methods and political culture theories of the 1960s to the policy-oriented studies of the 1970s, to the game theoretical perspectives and historical turn of the 1980s and early 1990s,” S. Tarrow, “Making Social Science Work Across Space and Time,” *American Political Science Review*, 90, 2(1996), p.390.